【214】

氏　名(本　籍)	高藤英樹(北海道)
学位の種類	博　士(法　学)
学位記番号	博乙第 1,147 号
学位授与年月日	平成8年1月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	社会科学研究科
学位論文題目	POLITICAL DEVELOPMENT OF MALAYSIA IN COMPARATIVE PERSPECTIVE : POLITICAL STABILITY AND THE PARTY SYSTEM (比較的観点におけるマレーシアの政治発展：その政治的安定性と政党制)
主　査	筑波大学教授　中村紀一
副　査	筑波大学助教授　辻中　豊
副　査	筑波大学助教授　真柄秀子

論文の要旨

本論文は，マレーシアの政治発展を比較政治学的に分析したものである。論文の主要な目的は，なぜマレーシアは，経済発展に伴い大きな社会経済的不平等が発生したにもかかわらず，1970年代以降政治的な安定を維持しえているのか，を明らかにすることにある。一般に発展途上国においては，社会経済的不平等が増大すると，市民の政治に対する不満も増大し，暴動，クーデターや権威主義体制の強化など政治体制の急激な不安定化（政治変動）が生じやすい。しかしながら，マレーシアは従来考えられていたこうした発展パターンを経ず，社会経済的不平等と政治的安定を調和させてきているのである。

本論文は，3部6章から構成されている。序論では，本論文が，(1)従来の政治発展モデルとは異なったひとつの経験的発展モデルとそのメカニズムを提示しようとしているということ，そして(2)これまで地域研究的アプローチに基づいてなされてきたマレーシア政治研究を比較政治学的に展開しているということ，の2点が研究の意義として指摘されている。

第1部は，まずマレーシアが70年代以降社会経済的不平等と政治的安定を調和させているということを比較分析を通じて明らかにし，そしてなぜそうした発展のパターンを辿っているのかを分析するための枠組みを検討している。第1章は，マレーシアが社会経済的不平等と政治的安定を調和させているという事実を文化的，風土的に類似した他のアジア諸国との比較を通じて明らかにしている。第2章では，このマレーシア特有の政治発展パターンをもたらしている要因を政党制に求めるとともに，マレーシアの政党制をヘゲモニー政党制と規定し，次章以下で行う実証分析の枠組みとしている。マレーシアのヘゲモニー政党制は，ヘゲモニー政党の内的組織化における包括力の強さ，その外的関係（対他政党関係）における包括力の強さ，その安定制によって基本的に特徴づけられている。

第2部では，マレーシアの政党制が具体的にどのようにヘゲモニー政党制へ移行し，そしてそのシステムをどの程度まで構造化・安定化させているかが分析されている。第3章は，政党（とくにヘゲモニー政党）の内的組織化の側面からそれを分析している。また，第4章は，政党（とくにヘゲモニー政党）の外的関係（他の政党との関係）と安定性の側面からそれを検討している。

第3部では，こうしたヘゲモニー政党制の適応性が具体的事例に即して記述されている。すなわち，ヘゲモニー政党制が，市民の社会経済的不満がきわめて高かった1974年前後の政治状況においていかに機能したか，農村部(5

章）と都市部（６章）においてこの政党制がどのように安定化機能を果たしたのかが実証的に検討されている。

最後に，結論においては，本論文においてなされたマレーシアの政治発展パターンとそのメカニズムの解明がこれからのマレーシアや他の第三世界の国々の現実の政治に対して，そしてマレーシア政治研究や政治発展研究に対して，どのような意義をもっているのか，その示唆が論じられている。

審　査　の　要　旨

本論文は，いくつかの点において，マレーシア政治研究および政治発展研究に対して重要な貢献をなしている。マレーシア政治研究に対してはまず第一に，マレーシア政治を骨太い比較政治学の論理構造を軸にして研究した点にある。マレーシアを含む東南アジア地域は，比較政治学的研究が質量ともに少ない分野であった。従来，とくに東洋史の影響を強く受けた日本の学会では，地域研究的アプローチが数多くなされ，マレーシアの特殊制が強調されがちであった。本論文は，マレーシア政治に対して比較政治学的アプローチをとることによって，地域研究的アプローチでは見過ごされがちであったマレーシア政治の普遍的要素を指摘した点において，評価されるべきであろう。第二に，本論文は，マレーシアの政党および政党制を理論的・分析的枠組みを用いて研究しようとしている点で，先行研究とは異なっている。さきに指摘したように，地域研究的アプローチは史的分析に重点をおくためにマレーシアの政党や政党制の特殊制を強調しがちであったのに対して，比較可能な分析枠組みの構築はマレーシアの政党や政党制をよりお客観的に考察する（特殊な側面と普遍的側面の考察）上で，重要なのである。第三に，本論文は，これまで部分的にしか研究されてこなかったマレーシアの政党組織を包括的に現地の一次資料を用いて研究している点で評価されるべきであろう。これまでのマレーシアの政党組織研究は，特定のマレー人政党のみに限定されるものなど部分的な現象にのみ焦点を当てるものが多かった。また70年代以降は，政党組織研究自体がほとんどなされてこなかった。また第四に論文自体が英語で執筆され，マレーシアの研究者など外国の研究者の批判に開かれている点も，意欲的な態度であると評価できるであろう。

政治発展研究に対する本論文の貢献は，まず第一に，政治発展研究に対してきわめて重要な影響力を与えてきたハンチントンの発展モデルとは異なったひとつの経験的モデルを本論文が提示したという点にある。ハンチントンの発展理論に対する事例分析としての意味を持つ本論文は，異なったモデルを示すことによって，かれの理論を反証し，より精密化する可能性を提示している。第二に，本論文は，ある特定のタイプの政党制（ヘゲモニー政党制）と政治的安定性の関係を実証的に分析したという点で重要である。第三世界における政党制のタイプと政治的安定性の関係については，これまで60年代後半から70年代はじめにかけて理論的な側面に限って議論されてきたが，両者が実際にどのように関係しているのかを実証的に示した研究は少なく，その意味で本論文は評価できる。第三に，本論文は，政治発展研究に対する政党・政党制研究の重要性を再認識させているという点で重要である。政党の発達度や政党制のタイプは，政治的安定性の問題にとどまらず，政治発展研究の現在の主要なテーマである民主化論にとってもきわめて重要な要因である。民主化（自由化）が近い将来に生ずるかどうか，生ずるとすればどのようにか，そして民主化後の民主主義体制はどの程度まで安定的に維持されるかなど，こうした民主化の諸問題に対して政党の発展度や政党制のタイプは重要な意味を持っているのである。

他方でこの論文のもつ課題の大きさに比して，必ずしも事例研究が十分な濃度の深みを持ちえたかにはやや疑問が残ると言わねばならない。とりわけ第三部の分析においては，より具体的で動態的な記述があってしかるべきであったように思われる。また理論と実証のバランスを計るためとはいえ，実証的には政治発展やマレーシア政治の複雑さが省かれ，理論的には近年に発展しつつある新国家論や新制度論の理論研究が軽視された側面があるようにも見受けられる。とりわけマレーシア政治での政治家のリーダシップなどの側面の分析も今後の課題として残されている。しかしながらこうした課題の存在は，本論文の基本的価値を損なうものではない。

よって，著者は博士（法学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。